

消化器外科における  
腹腔鏡（内視鏡）手術

福井勝山総合病院  
外科部長 大槻忠良



腹部の外科手術というと、以前はおなかを大きく切開して腫瘍の切除や腸管を切除・吻合（つなぎ）することでした。しかし近年腹腔鏡手術の発展により、おなかを大きく開くことなく小さな創で手術をすることが可能となりました。

腹腔鏡手術は過去には胆石・胆嚢炎など限られた疾患にのみ行われる手術でしたが、近年では医療技術と機器の発達に伴いその対象が拡大され、胃がん、胆嚢炎・胆石症、大腸がん、肝臓がん、脾臓、虫垂炎、鼠経ヘルニアなど、様々な消化器外科領域手術で導入されています。このうち当院では、胃がん・大腸がん・胆石胆嚢炎、虫垂炎、鼠経ヘルニアに対して腹腔鏡手術を行っています。

腹腔鏡手術では、腹部に5mmから1・5cm程度の切開で数か所の穴をあけ、腹腔内に炭酸ガスを注入し膨らませた状態で内視鏡や鉗子を挿入し、モニターを見ながら手術を行います。

摘出する臓器や必要な手技によって追加で5cm程の切開を追加することはありますが、従来の開腹手術と比べて明らかに創が小さくなり、術後の疼痛は小さくなります。また、腸管癒着の危険性も減少し、全身の運動機能の回復も早くなるため、入院期間の減少が見込めます。

ただし、開腹手術と比べて手術中の視野や手術可能範囲が制限されるため、手術が長時間となったり、腹腔内の状態により途中で開腹手術に移行する場合もあります。

また、近年ではロボット支援内視鏡手術の発達も顕著です。福井県でも福井大学病院などで導入されており、直腸癌や胃癌の手術が行われています。

ロボット支援内視鏡手術では腹腔鏡下手術でも届きにくい部位で細かい作業が可能となり、精密で繊細な切除が行える利点がありますが、より高度な技術と機器設備が必要となり、手術時間がより長くなるなどの短所もあります。

病院では患者さんの病態に合わせて、開腹手術・腹腔鏡手術の両方について説明し、より良い治療法を選択できるお手伝いをしています。また、消化器疾患だけでなく、婦人科・耳鼻咽喉科・泌尿器科の領域でも腹腔鏡・内視鏡手術が行われております。

正しい知識と理解をもって治療が受けられるよう、腹腔鏡手術について今後も興味を持っていただけると良いと思います。



オンオンいこうぜ！ 勝山ちおこ



地域おこし協力隊  
西垣 翔太さん

3年間のハイライト  
コロナ禍真っ只中ではじまった活動1年目

地域おこし協力隊の活動は、2020年4月からでした。当初はコロナ禍真っ只中。元隊員の太田さんとテントサウナの活動から始めたので、正直、一番悪いタイミングで来てしまったのかなとも思いました。しかし、そんな中でも人数や時期に配慮しながら、定期的にイベントを行っている中で市内のさまざまな方達と知り合うことができました。

スペインのキャラクターデザイナーが勝山を来訪

市外からの関係人口を増やすことを目的にしていた私にとって、転機は2020年10月にスペインの



デザイナーのセスクさんを勝山へ連れてきたことでした。全国的にも、アーティストが地域に滞在し、そこで受けたインスピレーションを元に作品制作する活動があり、それと同様に、数日間滞在の後、福井で発掘された恐竜5種類の3Dのキャラクターを制作していただきました。

関係人口を呼ぶ方程式  
「地域資源×クリエイター」の可能性

それがきっかけとなり、2年目からはクリエイターと勝山の地域資源（繊維、恐竜）を結び、産業のPRとプロジェクトを通して勝山に中長期的に関わる人たち（関係人口）を増やそうと考えました。

繊維では、特に嫺ラコム代表の織田さんに、恐竜は、勝山市観光まちづくりの今井マネージャーにご協力をいただきながら、クリエイターと新しい商品やサービスの開発を行いました。イベントを一緒に開催しました。フジロックのデザイナー渡辺さんが関わってくれるなど、彼らと1回では終わらない



関係づくりに注力しました。また、同時期に「ワーケーション」に注目が集まっていたこともあり、すぐにワーケーションプランをつくり、市外からも来ていただきました。

市外からの受け入れ人数は73人。関係人口から移住へとつながる

関係人口構築のために、この3年間で受け入れた人数（来訪者）はのべ73人となりました。地域や国もさまざまな海外からは、アメリカ、カナダ、スペイン、台湾等、またデザイナー、メディア関係者、アパレル経営、インスタグラマーなど多様な人々に実際に勝山に来て、体験をしていただきました。昨年7月から隊員となった山崎さんは、その関係人口の中から移住へとつながったお一人です。

2年間で127人が参加した学びの場「まちのデザインスクール」

3年目は外部の人たちと市内の人たちがもっと広く、点ではなく面に関わって欲しい、また、地域のプレイヤーの方々とも繋がりたいと思います。「まちのデザイン



3年間を終えて。これからの展望

まずは、3年間、ご協力をいただいた皆様に感謝の気持ちでいっぱい입니다。初年度は、コロナ禍で大変な時期もありましたが、状況が落ち着くにつれて活動の幅や関わる人の数が増えていきました。この3年間を農業に例えると、土壌を耕し、種を蒔いたようなイメージです。芽がはじめた「まちのデザインスクール」のように、ここで培ったコミュニティを大きく育てていきたいと考えています。具体的には、空き家をリノベーションして市民が集える場をつくったり、外部からきた人たちが滞在しやすい環境づくりを行いたいと思います。

これからも勝山で、持続可能な事業などもあわせて模索していきます。今後ともよろしくお願ひします。



地域文化を掘り起こそう  
シリーズ「市内の小学校」 ⑤③

市史編纂室 山田 雄造

三室小学校

遅羽地区には明治6年（1873）9月に遅羽小学校が蓬生区の専勝寺を仮教場として創設された。学区は比島・蓬生・崎崎・大袋・北山の5区であった。教場はその後、蓬生・崎崎・大袋の個人宅を転々とし、翌年9月、大袋区字池田に校舎を新築し三室小学校と改称した。

児童数は60〜70名で推移し、同24年以降は100名近くに達することもあった。明治35年校舎は新築されたが、同41年義務教育の延長にともない児童数169名となり、翌年校舎が増築され3学級編成となった。この頃、校名は元の遅羽小学校に戻ったようである。

大正12年（1923）には高等科を併置し、遅羽尋常高等小学校と改称した。昭和5年（1930）に複式が解かれ7学級に、10年には高等科も複式を解き8学級となった。翌11年校歌が作詞笠松一夫、作曲酒井利雄により制定され現在に至っている。

戦時下には遅羽村国民学校となり、同22年新学制により6学級で村立三室小学校が成立した。同年村立の三室中学校も設立されたが、24年勝山町遅羽村組合立勝山中学校創立にともない廃校となった。

下荒井区には明治7年に下荒井校があったが、同11年前後に師範校となりその後時期は不明であるが三室小学校に併合された。

写真の校章は九頭竜川の竜の爪を三方に、中央に三室の室を配してある。これは竜の爪が玉つかむ姿に、遅羽の子供たちが大きな夢と宝を持つて欲しい、との期待がこめられています。



三室小学校の校章